

[1]多摩ニュータウンで考える多世代コミュニティの可能性

[2]政策科学科 二年山本大介

[3]100 年後の未来では、世界の人口は 100 億人を突破されると言われている。その一方で、日本の人口は減り続けて現在の半分以下になると言われている。人口減少は都内ではほとんど感じる事がないが、地方に足を運ぶと既に加速度的に進んでいる事が実感できる。地方では、自然減少という出生率の低下に加えて都市部への人口流出が同時に起こっているためである。高校生の時に訪れた山形県の大江町の七軒地区では、限界集落を迎えていた。訪れた時には子供が 2 人しかいないほど過度な人口流出が起きてしまっている。さらに超高齢化社会によって地域コミュニティが崩壊し、伝統的な祭りが存続出来ないというのが現状だ。全国にはこのように人口減少によって消滅してしまいそうな可能性がある市町村が 896 も存在するとの報告がある。また、私の生まれ故郷でもある福井県でもシャッター商店街が増え地方衰退の波を感じている。このような経験を経て、私は地方活性化のあり方を研究したいと考えていた。大学に入り細野研究室の門を叩くと、中央大学に隣接する多摩ニュータウンでも少子高齢化・人口流出が起きていることを知った。そして、私は多摩 NT での地域の現状を研究し、その活性化のあり方を見つける事が出来たならば他の地域にも応用できるのではないかと考えた。そのため、本稿は日本の現状を踏まえた上で、多摩 NT の現状と課題を分析し、私なりの方策を提案することを目的にしている。

4 大都市では高度経済成長により、大量の労働人口が流入したため、短期間で大量の住宅を作る必要があった。これが、三大都市圏を代表とするニュータウン計画を誕生させる大きな要因だった。多摩ニュータウンでは、1971 年に初めて諏訪・永山地域での入居が始まった。当時は、多摩ニュータウンは魅力的な街として若い世代や子育て世代が多く入居し、大変賑わっていた。しかし、今日では諏訪・永山地域といった初期開発地地域での少子高齢化・若者流出が問題になっている。私なりに分析したところ住居のニーズのズレ、職場の遠さ、活気の消失が若者の流出、及び新入居者の数を減らし、結果として少子高齢化が起きていると推察した。とりわけ、活気の消失に焦点を置くと交流の場であった近隣センターの衰退や建物の構造がコミュニティの創造及び維持を阻害している実態が浮き彫りになった[図 1]。活気の再興には、積極的に地域のために取り組んでくれる人が必要である。また持続性の観点から見ても、若い世代が望ましい。そこで、本稿では、初期開発地地域の団地に大学生を格安で住んでもらう代わりに地域の奉仕活動を行ってもらうという政策を提案する。また、多摩ニュータウン及びその周辺地域では 18 大学があるため、大学間で連携することで地域活性化を

大規模で行えると確信している

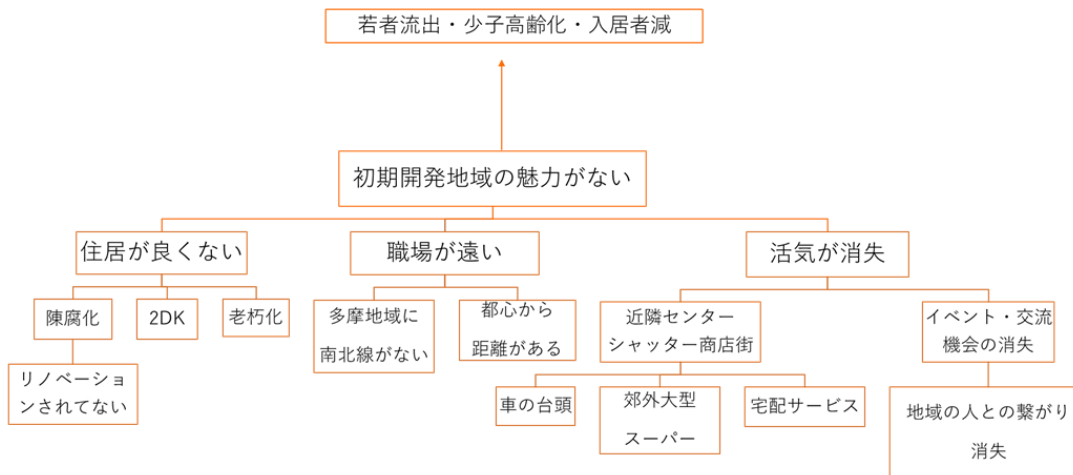


図 1 魅力低下の形成要因

[4]、千里・泉北・多摩ニュータウン、モデル地域の視察及び、各関係者への取材、永山地域でのアンケートの実施



千里ニュータウンひがし街角広場を運営している太田さんとの写真